

『ロビンソン・クルーソー』 —ヒーローと神の恩寵—

吉田 一穂

序

ダニエル・デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) のキャリアにおいて最も重要な日は、1719年4月25日であった。その日、『ロビンソン・クルーソー』 (*Robinson Crusoe*, 1719) が初めて出版されたからである。その前、これといった小説はなく、聖書を除いてイングランドやスコットランドの読者に広く受け入れられた小説はなかった。ジョン・ロバート・ムーア (John Robert Moore) は、『天路歷程』 (*The Pilgrim's Progress*, 1678) について「小説の多くの要素を持っているものの宗教的教示の作品としての意図を持っている」と述べている (Moore 55)。ムーアの指摘しているように、『天路歷程』には宗教的教示が見られるが、『ロビンソン・クルーソー』にも宗教的教示が見られることを見落としてはならない。

デフォーが『ロビンソン・クルーソー』を書いているとき、イングランドでは宗教的・政治的議論が盛んに行われていた。1688年の名誉革命でカトリックの君主ジェイムズ (James) 2世 (1633-1701) からウィリアム (William, 1650-1702) とメアリー (Mary, 1662-94) になったにもかかわらず、アン (Anne) 女王 (1665-1714) の王冠が人気のないハノーヴァー (Hanover) のジョージ1世 (George I, 1660-1727) に渡ったとき、イングランドは、ジャコバイト (Jacobite: 亡命した英国王ジェイムズ2世の支持者) の反乱を恐れた。王座の復活を要求しようとして、ジェイムズ2世の息子でありカトリックの跡取りであるジェイムズ・スチュアート (James Stuart, 1688-1766) は、1715年スコットランドに侵入するため軍隊を派遣した。カトリックは、イングランドの政治的・宗教的アイデンティティにとって脅威であった (Traver 546)。

このことから、『ロビンソン・クルーソー』には、当時のプロテスタントとカトリックをめぐる状況を想起させる箇所が若干見られる。しかし、デフォーはそれを中心的テーマとして扱ってはいない。レオポルド・ダムロッシュ・ジュニア (Leopold Damrosch, Jr.) が指摘しているように、クルーソーの宗教的変化こそが中心的できごととして示されている (Damrosch 81)。J・ポール・ハンター (J. Paul Hunter) は、「若いクルーソーにとって単に逃避の意味しかなかった旅は、巡礼に変化する。なぜならば、クルーソーの宗教的変化は、彼の当てのない旅に目的をもたらし、彼の行動に真の意味付けをするからである」と

述べている (Hunter 68)。注目すべきことは、ハンターの述べるクルーソーの旅が彼の宗教的変化に必要な不可欠な旅であることだ。¹クルーソーが父親の忠告に逆らって旅に出ることは、彼に一時的に不幸をもたらしたとしても、神を知る過程において欠かせないものであることから、デフォーは意図的にヒーローに旅をさせ、自身の思想を読者に示していると考えられる。しかし、現在に至るまでヒーローの宗教的変化と旅の必要性は十分に論じられてきていない。そこで、本論文ではヒーローの宗教的変化と旅の必要性を深く考察し、デフォーがいかなる思想を読者に示しているかについて述べてみたい。

1. 孤島に到るまで

『ロビンソン・クルーソー』をヒーローの宗教的変化という観点から考えるとき、三段階に分けて考えることができる。すなわち、孤島に到るまで、孤島にたどり着いてから、そして他者との遭遇である。まず、孤島に到るまでのヒーローについて考えてみたい。

1632年ヨーク (York) で生まれたクルーソーは、商業を営んで相当な財産を作った裕福な家で暮らしていた。彼は、しかるべき努力をすれば、外国へ旅をしなくとも、しかるべき後援のもとに出世し、安楽な生活を送ることができたはずだった。父親も息子に安楽な境遇で静かに一生を送ることを望んでいたが、クルーソーの唯一の望みは、外国に出かけることであった。クルーソーは父親の忠告に逆らい、1651年9月1日ロンドン行きの船に乗り込む。この船は嵐に会い、クルーソーは大変な恐怖に襲われ、「悔い改めた放蕩息子」(8)と同様、²父親の家に帰ることに決める。しかし、海が静かになったのを見、元気を回復したクルーソーは、決心を忘れる。彼はまた、大嵐になって船が沈んでからも家に帰ろうとしない。「もし私がハル (Hull) に戻って、家に帰ることにしたならば、全ては順調に行って、私の父親は、我が救世主の譬話に出てくる、放蕩息子の父親と同様に私のために肥えた牛を殺して料理させたに違いない」(14)と聖書の放蕩息子の譬話を持ち出しながらもヒーローが改心しないのは、自身の限界を痛感していないためである。

旅は、ヒーローが自身の限界を知るまで続けられる。船長に二度と航海に出かけないように忠告されたクルーソーは、「あなたは、もう航海なさらないのですか」(15)と切り返すが、船長に次のように言われる。

That is another Case, said he, it is my Calling, and therefore my Duty; but as you made this Voyage for a Trial, you see what a Taste Heaven has given you of what you are to expect if you persist; perhaps this is all befallen us on your Account, like Jonah in the Ship of Tarshish. (15)

「それは別です」と彼は答えた。「これは私の職業で、従って私の義務でもあるのです。しかしあなたは、ためしに船に乗ってみられたので、もしあなたが船乗りになられたらどうということになるかを、神があなたに示し給うたのです。私たちがこんな目に会ったのはあなたのためかもしれません。ターシシュの船に乗ったヨナのようなものです。

ここで船長がクルーソーをヨナにたとえていることに注目したい。ヨナ書においてヨナは、「立って、あの大きな町ニネベ (Nineveh) に行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである」(Jonah 1: 2) という神の言葉を聞く。神がこのように言ったのは、ニネベが周りの小さな国を多く滅ぼし、ほしいままにしていたからである。ニネベに行きたくなかったヨナは、タルシシュへ行く船に乗る。そうすれば神の命令から逃げられるかもしれないからである。しかし、船が港を出ると大嵐になる。人々は誰かが神を怒らせたにちがいないと考える。神を怒らせた人間を見つけるためくじを引くことになり、ヨナに当たる。神の命令に逆らったから大嵐になったと思ったヨナは、船のりたちに自身を海に投げこませる。ヨナが海の底に沈んでいくと、大きな魚がやって来てヨナを飲み込む。神が助けてくれたのである。ヨナは神に感謝し、神の言葉に従う決意をする。神が命じると、魚はヨナを陸に吐き出し、ヨナはニネベに向かう。ヨナは町じゅうを歩き回って、あと 40 日でニネベの町が神に滅ぼされることを伝える。このことを聞いた町じゅうの人々は神に詫び、そのようなニネベの人々を見て、神は町を滅ぼすのをやめる。

船長にクルーソーをヨナにたとえさせることにより、デフォーは、クルーソーが神の意志に反していることを読者に印象づけている。「父親の元へ帰って、神の怒りに触れて破滅に到るようなことはしないように」(15) と忠告する理由を船長は、「もしお帰りにならないならば、あなたはどこに行っても災難と失望を経験して、しまいにはあなたのお父さんが言われた通りになるに違いありません」(15) と言う。船長の言う父親の言葉とは、「身分や生まれつきに逆らって、不幸な境遇に走らないように」(5) という忠告であり、船乗りになるような不見なことをするならば、神は彼を祝福したりせず、父親の意見を聞かなかったことを後悔するだろうというものであった。父親の言う身分とは中産階級のことであり、中産階級にいれば、上流階級の乱脈な生活と贅沢も下層階級の過重の労働、必需品の欠乏、また栄養の不足のために生じる精神の苦痛も免れ、安楽な境遇で静かに一生を送ることができるのであった。ヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf) が指摘しているように我々は、規則正しく勤勉な中産階級の生活の全ての恩恵について考えるよう要求される (Woolf 8)。しかし、ウルフが注目する「中産階級の長所である節制、中庸、平穩、健康が最も望ましいものである」(Woolf 8) にもかかわらず、クルーソーは、家に帰

らずギニー（Guiney）地方との交易船に乗り、不幸を招いてしまう。サリー（Sallee）のトルコ海賊船に捕まり、奴隷にされてしまうからである。

ここで、なぜデフォーがクルーソーに父親の忠告に反して旅を続けさせるのかという疑問が生じる。G・A・スター（G. A. Starr）は、「家出をするということに関するクルーソーの衝動は、秘めた経済的目的や地理的な目的よりも、むしろ海そのものに向かっている。彼にとって海は十分魅力的なものであり、目的地へ到るいかなるキャリアの背景となるものでもない」と述べている（Starr 49）。当然、デフォーがスターの指摘するヒーローの衝動を描き出すため、父親の忠告に反して旅を続けさせたと考えられるが、デフォーの意図はそれだけではないと思われる。後の物語の展開を考えると、デフォーは、父親の意志と神の意志を区別するため、クルーソーに旅をさせたのではなかろうか。

注目に値することは、『ロビンソン・クルーソー』より前にジョン・ロック（John Locke, 1632-1704）が『市民政府論』（*Two Treatises of Government*, 1690）を書いていることだ。これは、1688年の名誉革命を正当化しようとして書かれた書である。この書の中でロックは、何人も自分が同意することなしに、他人の政治権力に服従させられることはないことを示している。ロックは、「両親は、彼らがこの世にきたとき、およびその後しばらくは、彼らに対して一種の支配権および裁判権を持っている。しかし、これは一時的なものだ」と述べた後で、「成長するにつれて、年齢と理性との力でそれは緩やかになり、ついには全くずり落ちて、その後では人間は自由にふるまうことができるようになる」と述べている（Locke 58）。さらに「神は両親をば、人類種族を継続するというその偉大な計画の道具とし、またその子に生命を与える源泉とされた。そうすることにより、両親にはその子孫を養育する義務を課し、また同じように子供には両親を尊敬する不断の努力を課したのである」とロックは子供には幸福と生命を与えてくれた両親を守り援助する義務があるとしながらも、「それは両親に、子供に対する支配権、法をつくりその生命自由を処分する権威を与えることから、はなはだ遠いのである」と述べている（Locke 66）。

ロックが述べていることは、子供にも意志の自由があるがゆえに両親にそれを妨げる権利はないということである。『ロビンソン・クルーソー』においてデフォーは、ロックの考えるところの意志の自由をクルーソーに与えたと考えられるのだ。奴隷にされたクルーソーは、主人の隙に乗じて逃げ出し、ポルトガル船に救われ、ブラジルまで行く。注目に値することは、一緒に連れて行ったジューリー（Xury）を譲ってほしいと船長に言われ、クルーソーがジューリーがキリスト教徒になることを条件に10年の後に自由にするという約束をとりつけることである。このことは、ヒーローが後にキリスト教と向き合うことの前触れとなっている。ブラジルで農園を経営したクルーソーは、そのまま農園を経営していれば益々幸せになることができたのであるが、またしても放浪癖を止められず、航海に

出る。彼が船に乗るのは、1659年9月1日であり、これは、8年前に彼が両親の命令に背き、ハルから出帆したのと同じ日である。デフォーは、クルーソーが船に乗る日とハルから出帆した日と同じ日にすることにより、彼が両親の支配に逆らい続けていることを印象づけている。

ところで、クルーソーにはデフォー自身を思い起こさせるところがある。デフォーは、1660年獣脂ろうそく製造業者の息子としてロンドンに生まれた。デフォーは、最初長老派教会の聖職者になるつもりだったようである。この理由で彼は、ストーク・ニューイントン (Stoke Newington) にある「国教反対者のための学校」(Academy for Dissenter)に通っていた。デフォーの意図は、非国教徒の聖職者になることであったが、その考えは中止となった。彼は、靴下メリヤス類の製造業者となり、多くの外国の業者と順調に取引を行うようになる。アリスター・E・マックグラス (Alister E. MacGrath) は、「デフォーは、西ヨーロッパを広く旅し、旅という概念に魅せられていた」と述べるだけでなく、旅という概念を「『ロビンソン・クルーソー』の中心にある概念」だと指摘している (MacGrath 488)。注意しなければならないことは、『ロビンソン・クルーソー』において、デフォーが自身の魅せられた旅を用いて自らの思想を表現しようとしていることだ。マイケル・サイデル (Michael Seidel) は、「クルーソーの流浪は、宗教的変化への招きであり、彼にとってその変化とは、単に場所から場所への移動だけでなく、ある心理状態から別の心理状態への想像上の変容であり、心理的変容である」と述べている (Seidel 113)。サイデルが指摘する心理的変容のため、クルーソーの乗った船は座礁し、彼は孤島で暮らさなければならなくなるのだ。船が嵐のためにたいいていの場合通る場所から何百マイルも遠くに吹き流され、彼が島に漂着するのにはわけがあるのだ。次に孤島に着いてからのクルーソーの変化を見ていきたい。

2. 孤島での生活

孤島に着いたクルーソーは、座礁した船から生活に必要なものを運び出す。注目に値する点は、彼が金を見て「麻薬よ！」(57)と言うだけでなく、「何の役にもたたない」(57)と考えることである。デフォーはあえてヒーローを貨幣経済の成り立たない孤島に送ることにより、心理的に救いを求める心理状態に追い込んでいる。

島に来て記録やペンや紙がないために、時間の経過を忘れ、日曜日と他の週日の区別さえも解らなくなるといけないので、クルーソーは、四角い柱の側面に毎日刻み目を付ける。彼は、大きな柱にナイフで「1659年9月30日に私はここに上陸した」(64)と頭文字で刻みつけ、この柱で十字架を作って漂着した海岸に立てる。このことは、象徴的なできごとであり、後の彼の変化を暗示している。

まず、クルーソーは、現在の自分の境遇について真剣に考え、良いことと悪いことを書いてみる。クルーソーは、「私は言わば、世界に住んでいる人間の中から選り抜かれていて、ただ一人隔離され、惨めな思いをして暮らさなければならない」(66)と書きながらも、「しかし私は同様に、船の乗組員全員の中から選り抜かれて死を免れ、私をそのように奇跡的に助けてくださった神は、私を現在の状態からお救いになることができになる」(66)と書いている。また彼は、「私には、私と口をきいたり、私を慰めてくれたりする仲間が一人もいない」(66)と書きながらも、「しかし、神は船を海岸に非常に近く寄せてくださった。そのために私は多くの必要品を手に入れることができ、それに足りないときはそれを用いて不足を補い、一生暮らすのに困らない」(66)と書いている。このことは、クルーソーが「絶望の島」(70)と名付ける島にいても神の恵みがあることに気付いたことを意味している。

11月4日の朝にクルーソーは、時間割を作り、仕事をする時間、銃を持って出掛ける時間、寝る時間、気晴らしの時間などを決める。ジェイムズ・サザーランド (James Sutherland) は、「いまだかつてセルフメイド・マンがいたとすれば、それはロビンソン・クルーソーである。彼はまじめで勤勉なイギリス人であり、困難に押しつぶされず、鍛えられ、過ちを犯すものの再び挑戦し創意工夫し、運命に身をゆだねる」と述べている (Sutherland 232)。サザーランドが述べているように、クルーソーは、勤勉、創意工夫によって孤島での生活を送る。ただ最初、麦や山羊や鳥の肉だけでなく海亀の肉にも恵まれるので、神に救いを求めるほど切迫していない。彼が救いを求めるのは、病気になるときである。クルーソーは、頭痛や発熱だけでなくおこりの発作に襲われ、「神よ、私を見捨てないでください。神よ、私を憐れんでください。神よ、私を助けてください」(87)と叫ぶ。さらに彼は、恐ろしい夢を見る。真黒な雲の中から、火柱に包まれて、一人の男が地面に降りてくる。恐ろしい顔をした男は、クルーソーの方にやって来て、恐ろしい声で「これだけのことがあっても、お前はまだ悔い改めようとしなから、お前はもう生きることができないのだ」(87)と言って槍を構えて殺そうとする。この夢の後、クルーソーの中で長い間眠っていた良心が目覚め、彼は、過去の生活を後悔し始める。

注目に値することは、エドウィン・B・ベンジャミン (Edwin B. Benjamin) が指摘する「クルーソーの克己と神の発見への真剣な取り組み」が (Benjamin 35)、クルーソー自身の病気がきっかけとなっていることである。ブラジル人が病気を煙草で治すことを思い出したクルーソーは、煙草の入った箱の中に聖書を見つける。彼が偶然聖書の中で目にした言葉は、「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるだろう」(94) (Psalms 50: 15) という言葉だった。この言葉に強い印象を受けたクルーソーは、神に救われたことを実感し、病気が治ったことを神に感謝する。彼は、病氣回復

後の自身の変化を次のように日記に記している。

*July 4. In the Morning I took the Bible, and beginning at the New Testament, I began seriously to read it, and impos'd upon my self to read a while every Morning and every Night, not tying my self to the Number of Chapters, but as long as my Thoughts shou'd engage me: It was not long after I set seriously to this Work, but I found my Heart more deeply and sincerely affected with the Wickedness of my past Life: The Impression of my Dream reviv'd, and the Words, *All these Things have not brought thee to Repentance*, ran seriously in my Thought: I was earnestly begging of God to give me Repentance, when it happen'd providentially the very Day that reading the Scripture, I came to these Words, *He is exalted a Prince and a Saviour, to give Repentance, and to give Remission*: I threw down the Book, and with my Heart as well as my Hands lifted up to Heaven, in a Kind of Extasy of Joy, I cry'd out aloud, *Jesus, thou Son of David, Jesus, thou exalted Prince and Saviour, give me Repentance!**

(96)

7月4日 朝、聖書を取り出し、新約聖書からまじめに読み始めて、別に章の数は決めずに、ただ読みただけ、朝と晩に毎日聖書を読むことにした。そうしているうちに、私は今まで私が送っていた生活の罪深さを次第に身にしみて感じるようになった。前にも言った夢のことが記憶に戻ってきて、そのとき聞いた「これだけのことがあっても、お前はまだ悔い改めようとしなさい」という言葉は私を強く刺激した。そしてある日のこと、私に改悛の念を抱かせてくださることを、熱心に神に祈っていると、神の恩寵によってちょうどその日に、聖書で「彼は人を悔い改めさせて、その罪を赦すために、君主、また救世主の位を授けられ給う」という言葉を見つけた。私は聖書を投げ出して、両手とともに心も天に持ち上げる気持ちで、一種の法悦に浸って「ダビデの子、イエスよ、偉大なる君主、また救世主よ、私を悔い改めさせ給え」と叫んだ。

クルーソーが「このとき私は一生のうちで、初めて本当の意味で神に祈ったと言える」(96)と語っているように、7月4日は彼にとっての内的覚醒の日と言ってもいい。孤島にやって来て1年後の9月30日に彼は、自身が犯した多くの罪を神に告白し、神が下した罰の正しさを認め、イエス・キリストによる慈悲を求めて祈る。また2年後の9月30日に彼は、孤独な生活で幾度も体験した神の慈悲に対して、敬虔な気持ちで感謝を捧げる。

イアン・ワット (Ian Watt) は、16世紀にかつてあった断固とした内省の型を回復し体

系化し、³ 聖職者だけでなく信徒にとっての最高の宗教的儀式としたのがカルヴィン（John Calvin, 1509-64）であることが一般に同意されていることを指摘している（Watt 24）。イギリスにおいては、イギリス国教会に不満で、カルヴィンの説を奉じたプロテスタントをピューリタン（Puritan）と言ったが、17世紀においてもピューリタニズムとピューリタニズムへの共感、英国国教会から全く消え去ったわけではなかった（Winship 702）。マイケル・P・ウィンシップ（Michael P. Winship）は、「非国教徒のトントン（Taunton）の教会教師ジョセフ・アライン（Joseph Alleine, 1634-68）は、穏健派のピューリタンであった。非国教徒のリチャード・バクスター（Richard Baxter, 1615-91）と同じように彼は厳格なカルヴィニズムに不信感を抱いていた」と述べている（Winship 703）。厳格なカルヴィニズムに不信感を抱きつつもカルヴィンの説を支持した人々もいたのである。

クルーソーが島に来て3年目にしたことの中で注目に値することは、規則的な日課の中で、第一に神に仕えることと、聖書を読むことを一日に三度欠かさず実行することである。このことは、彼が内省を習慣化したことだけでなく、神と向き合う姿勢になっていることをも意味する。デフォーがヒーローに生まれた9月30日の26年後の9月30日に孤島にやって来させることには意味があったのだ。それは新たな生を意味する。肉欲、物欲、虚栄心に駆られない孤島に来てこそ、クルーソーは神と向き合い、神の恩寵を深く感じるからである。神を知るということを第一の目的と考えようになった点で、クルーソーはカルヴィンの片鱗を感じさせる人物となる。『ジュネーブ教会信仰問答』（*Le Catéchisme de L'Eglise de Genève*, 1542）の最初でカルヴィンは、人生の主な目的を「神を知ること」だとしているからである。しかし、まだ彼のキリスト教に対する確固とした考えはできあがっていない。次に、ヒーローにさらに変化をもたらす他者との遭遇について考えてみたい。

3. 他者との遭遇

クルーソーが孤島に来て他者の存在を意識し始めるのはある日の正午頃、海岸の砂に人間の足跡を発見してからである。マークマン・エリス（Markman Ellis）は、「15年間島で一人で暮らした後、クルーソーは足跡を発見してより広い社会的な世界を考えざるを得なくなる。この簡単ではあるがなぞめいたしるしにより、「他者」という問題が生じる」と述べている（Ellis 47）。エリスが指摘する「他者」という問題に直面するクルーソーは、人食い人種が島に来た証拠と思われるものを見つける。それは、島の西南端の海岸一面に広がる頭骸骨や、手や足の骨であった。クルーソーは非人道的な残酷さ、又人間の墮落に対する嫌悪を感じる。

ところでマゼラン（Magellan, 1480-1521）の最初の世界一周旅行（1519-22）に同行した

アントニオ・ピガフェッタ (Antonio Pigafetta, 1480-1534) は、ブラジルで仇同士が互いに相手の肉を食べるという風習の始まりについて記している。ある老婆が一人息子を持っていたが、この息子が敵の部族に殺された。それで数日後に、この老婆の仲間が、息子を殺した部族の男を一人捕虜にして老婆のところに連れてきた。老婆はその捕虜を見ると息子を思い出して、まるで狂犬のようにその男に飛びかかり、背中に噛みついた。捕虜はやがて脱走することができた。そして仲間たちに背中の傷を見せて、自分が食われそうになった模様を話した。その後、他の部族が敵の部族の者を捕虜にしたとき、彼らを食べてしまった。今度は食われた方の一族が食った方の一族を食い、こうしてこの風習が生じた (ピガフェッタ 28)。

このような人肉を食うという人間の非人道的な習慣を憎悪しながらも、クルーソーは、野蛮人たちを襲撃することに戸惑いを感じる。自分に対して危害を加えようとしたり、生命を奪おうとしていない野蛮人を襲うことが正しいとは考えられないからである。それだけでなく、スペイン人たちがかつてアメリカで行った蛮行をも思い出すからである。ヨーロッパのキリスト教国で「残忍行為」(172)と語り伝えられるこの蛮行とは、コンキスタドール (Conquistador) によるものと考えられる。コンキスタドールとは、スペイン語で「征服者」を意味し、特に 15 世紀から 17 世紀にかけてのスペインのアメリカ大陸征服者、探検家を指す。彼らは、金銀を求めてアメリカ大陸を探索し、アメリカ大陸の固有文明を破壊し、黄金を略奪した。また、インディオの生命財産を脅かし、異教徒の女性に対し強姦・暴行を行なった者も多数存在する。⁴

野蛮人たちを襲撃することが自分の破滅を招くと考えるだけでなく宗教的にも間違っていると考えたクルーソーは、一旦その考えを捨てるが、11 人の野蛮人が上陸した際、殺されて食べられる運命にあったもう一人の野蛮人を助け、召使いにする。彼は、この野蛮人をフライデー (Friday) と名付ける。それは、彼の命を救ったのが金曜日だったからである。また、自身のことをマスター (主人) と呼ばせる。さらにクルーソーは、フライデーを父親が息子に対するが如く教育する。まずクルーソーは、フライデーに嫌悪したり、他の肉の味を覚えさせたりして人食い人種の癖をなくさせる。次に彼は、宗教的な教育をもフライデーに施す。クルーソーは、彼の国で信じられていたベナムッキー (Benamuckee) こそ造物主だと信じていたフライデーに、それが悪魔であると言うだけでなく、神について説明する。注目に値することは、クルーソーが徹底して聖書に基づいてフライデーを教化していることである。クルーソーの聖書に対する考えは次のように書かれている。

How infinite and inexpressible a Blessing it is, that the knowledge of God, and of the Doctrine of Salvation by *Christ Jesus*, is so plainly laid down in the Word of God; so

easy to be receiv'd and understood: That as the bare reading the Scripture made me capable of understanding enough of my Duty, to carry me directly on to the great Work of sincere Repentance for my Sins, and laying hold of a Saviour for Life and Salvation, to a stated Reformation in Practice, and Obedience to all God's Commands, and this without any Teacher and Instructor; I mean, humane; so the same plain Instruction sufficiently serv'd to the enlightening this Savage Creature, and bringing him to be such a Christian, as I have known few equal to him in my Life. (221)

神について知らなければならないことや、イエス・キリストによる救済の教えが、聖書にいかにも平明に、容易に納得できるように書いてあることは、実に有り難いことだった。そのために、私は誰にも教えられずに、ただ自分で聖書を読むだけで、これから自分がなすべきことが解り、今まで犯してきた罪をただちに心から後悔し、救世主イエス・キリストに縋って行いを改め、神が定め給うた掟を全て守るようになったのと同様に、今度はやはり聖書を読むことだけで、この野蛮人に光明を与えることを得て、彼を私が知っているどんな人にも劣らない、立派なキリスト教徒にすることができたのだ。

引用において主張されていることは、人間が聖書を通して立派なキリスト教徒になることができることである。クルーソーは、さらに聖書を「天国への最も確実な手引き」(221)と述べている。このことは、マルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) を思い起こさせる。ルターは贖宥状に抗議するだけでなく、⁵ピラミッド型の教皇権を否定した。彼の打ちだした聖書中心主義は、一人一人が聖書と向き合い、神と向き合うことの重要性を示している。ルターの運動をきっかけにカトリック教会に対する人々の不満が噴出し、宗教改革が行なわれたので、彼は「プロテスタント教会の父」とも称せられている。

聖書中心主義という点からのみクルーソーの考えはルターの思想に似ているだけでなく、後に「私は外国にいる間、特に島で一人で生活しているとき、カトリック教に対しては疑いを持っていた」(303)と述べていることから、カトリックに対して疑惑を持っている点でもルターに似ている。ただクルーソーは、野蛮人に殺されそうになっているところを助けたスペイン人のキリスト教徒に彼がカトリックであることを許可している。しかし、これは共存のための知恵であると考えられる。デフォーは、『ロビンソン・クルーソーのさらなる冒険』(*The Farther Adventures of Robinson Crusoe*, 1720)でクルーソーの立場をプロテスタントであると明言しているので、⁶根底ではカトリックを支持しているわけではなく、共存のために許可していると考えられるのだ。

後に英国船の船長を助けたクルーソーは、乗っとられた船を奪い返し、イギリスに戻る。ブラジルに農園を持っている彼は、ブラジルに行って住みつくつもりでいたが、宗教の点で決心がつかない。なぜならば、彼は、カトリックが最上の宗教ではないかもしれないと感じ始めるからである。このようなクルーソーの変化は、彼が孤島に行って聖書と向き合うことになった結果であり、デフォーは、自身の宗教に関する考えを主張するため、クルーソーを孤島に送り、彼に考えを語らせたのだと思われる。クルーソーが孤島にいた意味は、神の恩寵を知るためだけでなく、自身の宗教を確立するためでもあったのだ。

結び

以上、本論文では『ロビンソン・クルーソー』におけるヒーローと宗教的变化と旅の必要性を深く考察し、デフォーがいかなる思想を読者に示しているかについて考えてきた。孤島に至るまでのクルーソーは、父親の忠告に逆らい、船で外国に出るが、自身の限界を痛感していないがゆえに改心することはない。しかし、船が座礁し孤島で暮らさなければならなくなるがゆえに、彼は自身の過去を後悔し、病気の後、初めて本当の意味で神に祈る。規則的な日課の中、クルーソーは、神に仕えることと聖書を読むことを一日に三度欠かさず実行するようになる。また、肉欲、物欲、虚栄心に駆られない孤島に来て、彼は神と向き合い、神の恩寵を深く感じるようになる。フライデーと出会ってから、クルーソーは彼を徹底して聖書に基づいて教化する。このことは、デフォーの聖書中心主義の思想を表しているように思われる。またデフォーは、スペイン人のキリスト教徒にカトリックであることを許可しつつも、カトリックが最上の宗教ではないかもしれないと感じるクルーソーをも描き出している。このことによりデフォーは、クルーソーが自身の宗教を確立するために、彼を孤島に送ったのだと考えられる。

作品の最後で、デフォーはクルーソーが上昇して金持ちになることを表現するため、特別に聖書的な言葉を用いている。すなわち、「私は、ヨブ (Job) の終わりは、最初よりも良かったと言っていいかもしれない」(284) という言葉である。アラン・ダウニー (Allan Downie) は、この言葉について、「ヨブは欠点もなく、神の権威に反抗したわけでもなく、正しい人間であるがゆえに、試練によってためされた。どの点でクルーソーの苦しみがヨブの苦しみと似ているのであろうか？」と疑問を呈している (Downie 20)。ダウニーの考えているように、最初クルーソーはヨブのように正しく神を恐れる人間とは程遠かったので、ヨブほど精神的苦しみを味わっているとは言えない。しかし、ヨブが所有物を奪われるが如く、孤島に追いやられることにより、クルーソーは、それまでの自由な状態を奪われることとなる。このことにデフォーの意図があると思われる。すなわち、孤島で一人で暮らさなければならなくなる状態にヒーローを置くことにより、彼を神と向き合わせ、聖

書に導いたと考えられるのだ。「私は、ヨブの終わりは、最初よりも良かったと言っていいかもしれない」(284) というクルーソーの言葉は、直接的にはもちろんイギリスに戻り 5000 ポンド以上の金とブラジルでの年収 1000 ポンド以上の不動産を持つに到ったことについての言及であるが、作品全体を通して考えると、クルーソーが試練の後確固とした信仰を確立したことをも暗示している、と言っていいだろう。

注

- 1 ウィリアム・H・ヘイルウッド (William H. Halewood) は、「クルーソーの最も偉大な冒険は、霊的な冒険であり、小説にとって必要な事柄と考えられる」と述べている (Halewood 82)。
- 2 Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (Oxford: Oxford UP, 1993), p.8. 作品からの引用は、この版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、吉田健一訳『ロビンソン漂流記』(新潮文庫)を参考にした。
- 3 ワットは、「それぞれの個人の重要な務めとしての宗教的省察の考えは、プロテスタントイイズムよりもはるかに古い。それは、原始キリスト教の個人や主観の重視に由来する。そして聖アウグスティヌス (St. Augustine, 354-430) (=初期キリスト教会の指導者) の『告白』(*Confessions*) に究極の表現を見つけ出すことができる」と述べている (Watt 24)。
- 4 エルナン・コルテス (Hernan Cortes, 1485-1547) は、代表的なコンキスタドールである。コルテスは、敬虔なるカトリック教徒であったがために、インディオたちを人身御供などを掲げる残酷な旧来の宗教の因習から解放した。だが、スペイン人による隷属と搾取は、先住民の文化・伝統・宗教を粉砕し、先住民は、奴隷のように使役されるという状況に置かれた。このため現在では、コルテスの行為は、文化破壊行為として批判的に受け取られている。彼はまた、インディオの女性を妾として寵愛した。
ピガフェッタは、ファン・ディアス・デ・ソリス (Juan Diaz de Solis, 1470-1516) が 60 人の部下を引きつれて陸地探検に行ったが、油断しすぎたために食人種に食われてしまったことを記している (ピガフェッタ 34)。ソリスはスペインの探検家であり、コンキスタドールである。彼は、チャルーア (Charrua) 族に友好的に迎えられたにもかかわらず、彼らに従うよう強制したがゆえに、4 年後再び訪れた際、攻撃され、戦死し、食人文化のあったチャルーア族に食べられてしまう。
スペイン出身の聖職者バルトロメ・デ・ラス・カサス (Bartolome de Las Casas, 1474-1566) は、スペインが国家をあげて植民・征服事業を進めていた中南米にお

る不正行為と先住民族に対する残虐行為を告発した。

- 5 当時コンスタンティヌス帝 (Constantinus, 274-337) の時代に造られたサン・ピエトロ大聖堂の大改修のため資金が必要だった。そのため購入すれば罪を免除するという贖宥状 (免罪符) が教会によって大量に発行された。贖宥状を最も発行したのは、レオ 10 世 (Leo, 1475-1521) であった。彼は、メディチ家の出身で、ラファエロ・サンティ (Raffaello Santi, 1483-1520) のパトロンとして有名だった。
- 6 クルーソーは、この作品の中でローマ・カトリック教徒であるフランス人の司祭と出会う。この出会いは、海上で火事を起こした船から彼を救い出したことによるものであった。フランス人の司祭とクルーソーは、カトリックとプロテスタントという宗派の違いはあるものの両者の一致点を見出す。フランス人の司祭は、「我々の宗派の違いがどうであろうと、傲慢にも神の命令にそむいて罪を犯す者には神は祝福を通常垂れ給わない、という一般原則は我々全てが心から認めているところです。あらゆる良きキリスト教徒は、自分の世話している者が神とその命令を全く無視して生活するのを極力やめさせるように配慮しなければなりません」と言う (*The Farther Adventures of Robinson Crusoe* 86)。彼は、クルーソーの部下のイギリス人たちが野蛮人の女性たちを妻にしているものの、法律的に結婚していないことだけでなく、イギリス人たちが妻にキリスト教について何も教えていないことと、女性たちが偶像崇拜していることを問題とする。フランス人司祭の主張は、十戒に基づくものである。彼は、法律的に結婚していないがゆえに、イギリス人たちと妻たちが姦淫の生活を送っていると考え、女性たちが偶像崇拜をしているがゆえに「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない」、「それにひれ伏してはならない」(Exodus 20: 4-5) に逆らっていると考える。フランス人の司祭の考えに共感したクルーソーは、ウィル・アトキンズ (Will Atkins) の妻の洗礼式とアトキンズと妻の結婚式に立ち会う。

Works Cited

- Bemjamin, Edwin B. "Symbolic Elements in *Robinson Crusoe*", *Twentieth Century Interpretations of Robinson Crusoe*. Ed. Frank H. Ellis. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969.
- Damrosch, Jr. Leopold. "Myth and Fiction in *Robinson Crusoe*", *Modern Critical Interpretations: Daniel Defoe's Robinson Crusoe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Defoe, Daniel. *Robinson Crusoe*. Oxford: Oxford UP, 1983.
- . *The Farther Adventures of Robinson Crusoe*. London: Pickering & Chatto, 2008.
- Downie, Allan. "Robinson Crusoe's Eighteenth Century Contexts", *Robinson Crusoe: Myths and Metamorphoses*. Ed. Lieve Spaas, Brian Stimpson. London: Macmillan P, 1996.
- Ellis, Markman. "Crusoe, Cannibalism and Empire", *Robinson Crusoe: Myths and Metamorphoses*. Ed. Lieve Spaas, Britain Stimpson. London: Macmillan P, 1996.
- Halewood, William H. "Religion and Invention in *Robinson Crusoe*". Ed. Frank H. Ellis. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969.
- Hunter, J. Paul. "Robinson Crusoe's Rebellion Punishment", *Modern Critical Interpretations: Daniel Defoe's Robinson Crusoe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- MacGrath, Alister E. *Christian Literature: An Anthology*. Oxford: Blackwell Publishers, 2001.
- Moore, John Robert. "*Robinson Crusoe*", *Twentieth Century Interpretations of Robinson Crusoe*. Ed. Frank H. Ellis. Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1969.
- Seidel, Michael. "Crusoe's Island Exile", *Modern Critical Interpretations: Daniel Defoe's Robinson Crusoe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Starr, G. A. "Crusoe and Spiritual Autobiography", *Modern Critical Interpretations: Daniel Defoe's Robinson Crusoe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Sutherland, James. *Defoe*. London: Methuen & Co., 1971.
- Traver, John C. "Defoe, *Unigenitus*, and the "Catholic" Crusoe", *Studies in English Literature 1500-1900*. Ed. Logan D. Browning. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 2011.

Watt, Ian. "Individualism and the Novel", *Modern Critical Interpretations: Daniel Defoe's Robinson Crusoe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.

Whinship, Michael P. "Defining Puritan in Restoration England: Richard Baxter and Other Respond to *A Friendly Debate*", *The Historical Journal*. Vol.54. No. 3. Ed. Julian Hoppit, Clare Jackson, Michael Ledge-Lomas. Cambridge: Cambridge UP, 2001.

Woolf, Virginia. "*Robinson Crusoe*", *Modern Critical Interpretations: Daniel Defoe's Robinson Crusoe*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1988.

カルヴァン、ジョン、『ジュネーブ教会信仰問答』、外山八郎訳、新教出版社、2011.

ピガフェッタ、アントニオ、「最初の世界周航」、『マゼラン最初の世界一周航海』、長南実訳、岩波文庫、2011.

ロック、ジョン、『市民政府論』、鶴飼信成訳、岩波文庫、1982.